

標茶町

標茶町

面積：1,099.56km²

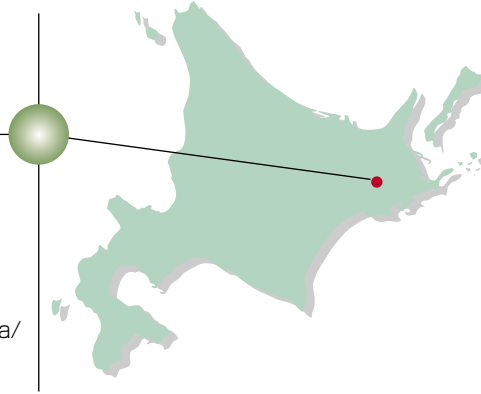
人口：9,388人（平成12年・国調）

町の花、木：コスモス（花）、なら（木）

町名の由来：「シペチャ」～大きな川のほとり

ホームページ

<http://www.town.shibecha.hokkaido.jp/yakuba/>



企画振興室長

小野寺 惇二

広域的な観点からの地域づくり

標茶町は、釧路管内のほぼ中央に位置し、地勢は大別して丘陵地帯と平野部に分けられ、丘陵部は山岳が少なく、標高は60～300mでおおむね丘陵起伏をなし、釧路川および西別川の各河川流域は平坦ですが、南東部には塘路湖、シラルト湖があり、釧路湿原をはじめとした湿地帯が分布しております。また、町内の最高峰は、町の北東端、阿寒国立公園内に西別岳(799.8m)があります。

明治18年に戸長役場が設けられ行政がスタートし、集治監や硫黄精錬所、現在釧路市にある日本銀行が熊牛支金庫として設置されるなど、一時は釧路に匹敵する賑わいをみせていましたが、これらが移転廃止され市街地は衰退することとなりました。

しかし、明治41年に軍馬補充部川上支部が設置され、このころから北海道拓殖計画に基づく移民入植がみられ、本町の開発が本格化し、国鉄釧網線や標津線が開通、製糖工場や亜麻工場が次々と設置されました。

さらに、戦後緊急開拓事業により、1,200戸あまりの入植者を迎え、昭和31年には釧路内陸集約酪農地域に指定され、これまでの主畜の柱が「馬」から「牛」に転換、酪農が基幹産業となり乳業工場が設置されました。

しかし、昭和35年の国勢調査人口17,424人をピークに各種工場の閉鎖、離農などにより人口減少が続き、近年では国鉄からJRへの改組、営林署など国の機関の統廃合により、多くの方々が転出することとなり、本町の盛衰はその時代における国内外の社会情勢に大きく作用されてまいりました。

最近では、基幹産業の酪農が年々生産拡大を続け、本州向け生乳のクーラーステーションの設置など、食料生産基地として全国有数の酪農地帯となっております。また、昭和62年に本町エリアが大きなウエイトを占める釧路湿原が国立公園に指定され、環境や景観の保全を前提としながら2つの国立公園をはじめとする美しく雄大な自然や農村景

観、環境を活用し、酪農などとの有機的な連携のもと魅力的な空間としての役割が大きな期待されているものと考えております。

町のめざす姿

本町は、先人のたゆみない努力によって、これまでの歳月の流れのなか数々の変遷を遂げ、新しい時代を力強く生き抜いてきました。風雪に耐え、冷害による凶作に苦悩しながらも馬産振興に励み、畑作に汗し、酪農に転換してからは、一大生産基地としての地位を築き上げてきました。

釧路湿原が国立公園に指定され、冬の湿原にS.Lの雄姿が復活し、全国からの熱い視線が向けられており、酪農が醸し出す田園風景とあわせて、いまや地域に住む私たちだけのものではなく、共通の心の財産とすべき存在となっております。

わが国は今、時代の大きな転換期を迎えており、標茶においても、少子高齢化の進行、価値観の多様化、環境との共生、財政の健全化など多くの課題に直面しており、従来の考え方や行動の枠組みでは、活力を維持し、新たな発展を果たすことは難しい状況にあり、これからの10年間は、これまでの10年間より変化と多様性に富んだ時代になると予想されております。

21世紀のまちづくりは、町民一人ひとりが、これまでのような依存体質から脱却し、まちづくりの主役であることを自覚し、自立と自己責任を基本に、いかなる困難にもその知恵と力を十分に発揮し、相互協力

「コッタロ湿原」釧路湿原の北側に位置する湿原です。美しい風景が望めます。



により、まちの活力を創出することが今求められています。

子どもから大人まで、だれでもが健康で安心して生きがいをもって暮らし「標茶町に住んでいて良かった」と思える町、「これからも住み続けたい」と思える町、多くの人たちから「標茶町を訪れてみたい」「住んでみたい」と思える町、自信と愛着を感じながら、次の世代に誇りをもって引き継ぐことができる魅力あるまちづくりを目指しております。

こうした考えをもとに、21世紀を夢と希望を持って力強く前進するために、まちづくりのテーマを次のように定めております。

夢を織りなす「標茶活力」の結集

～一人からはじまる まちづくり～

標茶の風土の中で、町民の豊かな暮らしを可能とするには、一人ひとりがどのような価値観を持ち、どのような生き方を求めていくかにほかなりません。

標茶のまちづくりは町民の活力や文化を育てるものであり、その活力や文化は生活のなかに息づくものです。

そして、その生活をより豊にしていける一人ひとりの努力がまちづくりの要素であり、その積み上げ結集が標茶のまちづくりです。

自由に意欲的に、夢とロマンを持ち続け行動する標茶人がたくさんいます。はじめは一人でも、みんなの夢を一本の糸に見立て、タテ、ヨコに織って行きましよう。

そして出来上がった生地に、標茶に無限にある素材活力パワーである豊かな自然環境や農業の恵み、ロマンあふれる標茶人を標茶活力として結集し、デザインし、21世紀の新しい時代に向かって自立する標茶町を築くことをめざしましょう。

この将来像「夢を織りなす『標茶活力』の結集～一人からはじまる まちづくり～」は、次の5本の柱からなっています。

- 1 人と自然が共生する環境の創造
- 2 だれでもが健康で安心して暮らせる快適なまち
- 3 クリーンで元気な産業の創造
- 4 創造性豊かな標茶人を育むまち
- 5 共に創るまちづくり

「スポーツ合宿の里づくり」日体大スケート部の練習風景。釧路川河川敷公園



さらに、まちづくりを効果的に、かつ、現実のものとしていくためには、重点となる領域を設定し、優先的にそして、総合的に施策や事業に取り組むことが不可欠であり、次の戦略プランを設定し、効果的な推進を図って行きたいと考えております。

1 だれでもが生涯現役で暮らせるまちづくり

本格的な高齢社会を迎え、だれでもが生涯現役で、安全で安心して暮らせるノーモラライゼーションの確立したまちづくりを進めます。道路、公共交通機関、公共施設、商店街などの「バリアフリー化」と併行して「心のバリアフリー化」を進めます。

2 安全で良質な“しべちゃブランド”の確立

豊かな自然環境や景観と共生する「酪農郷しべちゃ」の形成をめざし、効果的なふん尿処理など環境と調和した酪農の推進を図ります。また、生産者の顔の見える関係、心の通った交流を通じ、安全な食料の生産基地であると同時に、可能な限り地元で消費できる“しべちゃブランド”の確立、地産地消をめざします。

3 恵まれた自然環境や快適な都市環境を活かした

交流の里づくり

標茶の財産である、恵まれた自然環境や快適な都市環境を最大限に生かしたスポーツ合宿の里づくりを推進します。また、釧路湿原や西別岳などの自然環境を生かしたエコツーリズムの推進や、農村景観を活用したファームインや酪農体験の推進など、交流のステージづくりをめざします。

4 環境に配慮したまちづくり

釧路湿原をはじめとする自然環境を、次世代に引き継ぐため環境保全にとりくみます。省エネルギーの普及、再生可能なエネルギーの廃棄物など、環境に負荷の少ない地域エネルギーの開発、有効利用など循環型社会の推進をめざします。また、地元小中高校や大学、民間との連携をはかり、湿原の保全や調査研究を進め環境教育のフィールドづくりを行います。



「生活幹線道路」国道274号の整備。弱視者、高齢者が安心して利用しています。